

## 第六話 地震がやってきた（特別編）

### ●そのとき私は

2011年3月11日、午後2時46分。マグニチュード9.0という世界最大規模の地震が、岩手・宮城・福島の3県を中心とする東北地方を襲った。地震発生後2週間を経ても、強い余震は繰り返され、被災地の窮乏と混乱は収まらない。

「東日本大震災」と名づけられた今回の地震は、とくに沿岸部に壊滅的被害を与えた「津波」、そして福島「原発の爆発」による放射能の飛散と、阪神大震災では経験しなかった新たな事態が発生し、悲劇を増幅している。とくに「津波」の脅威は想像をはるかに越えるもので、海岸近くの村落をまたたくまに押し流し、リアス式海岸の地形を一変させた。それは、小松左京の大ベストセラーの映画化「日本沈没」で、やはり津波が列島に押し寄せ、沿岸部からゆっくり日本が沈没していく映像を思い出させた。

同時に市街では次々と火災が発生。町並みごと焼き尽くした。自然災害の猛威を前に、人間がいかに無力かを思い知らされるできごとだったのだ。まことに不謹慎ながら、少し時間をおいて私が考えたのは、これでまた大量の本が「水」と「火」で消えていったな、ということだった。津波、洪水、火災、空襲、そして大地震は、これまでも大量の本を潰してきた。

家屋や肉親を亡くされ、避難所で寒さと飢えを耐え忍んでいらっしゃる被災者たちに比べれば、何もなかったと同じである東京西郊在住の私だが、それでも少なからぬ影響はあった。3月11日のその日その時間、私は東京都千代田区竹橋にある毎日新聞本社ビルの3階にいた。毎週金曜日、「サンデー毎日」編集部へ赴いて、短評を書くなど読書ページを手伝っているのだ。

仕事を終えて、その週に書いた書評の校正ゲラが上がってくるのを待っていた。すると突然、ゆさゆさと横揺れが始まり、次に立ってはいられないほどの激しい揺れに変わった。東京は震度5強。私が体験したもっとも大きな地震、といってもいいだろう。窓の外を見ると、舗道に立つ街灯の先が腕を回すようにぐるぐると動き、気味が悪い。編集部フロアは騒然となり、机の上に積みあげた各出版社から届いた書評用の新刊書の山が一部崩れた。壁際に、やはり書籍の詰まった本棚が2本あり、あわてて抑えようとしたが、担当の編集記者から「あ、岡崎さん、触らないほうがいい。危ない」と声をかけられた。ほとんど無意識の行為だったが、確かに体より大きく頑丈なスチールラックが身体の上に倒れたら、ケガは避けられない。

それでも、壁にかかった額がいくつか床に落ちてガラスが割れた以外は、目立った被害はなかった。自宅にすぐ電話をかけたが、すでにつながらなくなっていた。目の前の固定電話でも、携帯電話でも同じ。編集部には数台のテレビがつねにつけっぱなしになってい



の営業は難しいという。

### ●我が家は無事か

そう聞かされると、だんだん自分の家が心配になってきた。我が家は地下に書斎と書庫があり、ひと一人なんとか歩ける空間を残して、あとはすべて本棚と本で埋まっている。あいにく、どれ一つとして、本棚に転倒防止等の地震対策はしていない。壁ぎわの本棚を含め、4列が並んでいるスペースもあり、これがドミノ式に倒れたら、足を踏み入れることもできないはず。後片付けも大変だ。膨大な蔵書ゆえの、いらぬ心配だ。

人が大勢亡くなっているというのに、本の心配をしているのは不謹慎だとわかっているが、考えはまずそこに向う。「ぶらじる」で2時間滞在中、事態は進展せず、電話も通じない。電車も動きそうにない。残る手として、情報がもっとも早く集まってくる新聞社に戻ることにする。結論から言えば、そのまま毎日新聞社の「サンデー毎日」編集部で一夜を明かすことになった。

編集部には災害用の緊急電話があり、これを借りて、家にも連絡を入れることができた。出て来たのは娘で、「お父さんの本、だいじょうぶか？」と聞くと、「ううん、もうむっちゃくちゃ」と言う。地下に続く階段の両側にも本や雑誌が積んであり、それがなだれ落ちて行く手を塞いだらしいが、どうやら彼女はそれを踏み越えて点検に行ったらしい。「本棚は、倒れてる？」という問いには、「ううん、それはだいじょうぶ。床は本だらけだけど」と答えた。まずはひと安心。

そこで、気付いたのは「みんな（と言っても妻と娘とネコ1匹の家族）、だいじょうぶだった」と尋ねたのが、果たして「本」の前だったか、後だったか。ひょっとして、家族の無事より、本のことを優先して聞いたのではなかったか。もしそうなら、将来にわたって遺恨を残すことになる。「お父さんは、私たちより、まず本の無事を心配していた」と。ううん、困った。

一睡もできないまま、毎日新聞社で朝を迎え、ようやく動き出した中央線をなんとかつかまえて帰途につく。いつもなら1時間で帰れるところが、4時間以上かかった。それも致し方ない。家に着いて、靴を脱いで荷物を下ろすと、すぐさま書庫のある地下へ向かった。崩落した階段両脇の本、雑誌は、一応片づけられていた。地下まで降りて見渡しところ、たしかに床が見えないぐらい本や雑誌が散乱しているが、最悪を想像した眼には、最小限の被害で済んだように見えた。

本棚は倒れていない。本棚に並べた本も無事なようだ。ただし、本棚を背に床から高く積み上げられた本の塔は崩れていたし、本棚の上に横積みしていた本の上の数冊は落下していた。本棚と本棚のあいだは、だからすぐには入りこめそうもない。床に散乱した本を片づけるにも、置く場所がない。仕方なく、本や雑誌を踏み砕きながら歩くことになった。あとで確かめたら、函入りの本など、函が壊れていた。

私の場合を見るかぎり、やはり地下は地震の揺れには強いようだ。これが、前に住んでいたマンション 2 階だったら、おそらくこの程度の被害ではすまなかつたろうと思う。本棚が倒れてその下敷きにならない限り、火災が発生し、燃えたり、消防の放水を受けないかぎり、本というのは意外に丈夫なものだ。

### ●草森紳一の場合

地震から数日たち、自宅書庫の散らばった本を少しずつ片づけながら考えたのは、もし草森紳一が生きていたら大変だったろうということだった。2008 年に逝去した評論家の草森紳一は、本を藪のようにして生きていた。中国文学が専門なのだが、筆先はマンガ、写真、広告、デザインと八方に及び、書物や資料をもとに書くタイプだけに際限なく自宅に本が増えたのである。

「収入の 7 割がたは、本代に消える。異常に過ぎる。いっこうに古本屋の借金は、減らない」と、『随筆 本が崩れる』（文春新書）に書いている。私は草森本人に会ったことはないが、週末に古書の即売会が開かれる東京古書会館の帳場で、後ろに積まれた注文の本に下がった短冊に、よくその名前を見た。

草森は亡くなるまでの 20 年間で、永代橋のたもと門前仲町に建つ 2LDK のマンションに独居していた。ここがまさしく本の巣窟。想定 3 万冊が、独り身には十分なはずのマンションのすべての空間を埋めつくしていた。このマンションを訪ねた経験を持つ四方田犬彦は、「ぼくはここに来るときに、本箱を除いて家財道具の一式を捨ててきたんだと、さりげなく口にしたことが印象的だった。なるべく日の当たらなく、窓がない部屋を探したらいい物件があつてね、ともいった」（『女神の移譲』）と書いている。そこは玄関といわず、廊下といわず、いたるところに本が堆積し、寝室のベッドさえ本で埋もれ、唯一、ひと 1 人が寝る場所だけが確保されていた。寝ていても本が落下し、顔面を直撃するのだという。

『随筆 本が崩れる』によれば、壁面を占める本棚が 21 本。上下 2 段の下駄箱には和本を積みあげ、2 つの納戸にも美術書が入れられていた。そのほか、積めるスペースがあれば、すべて本を横積み、その積み上げ技術をこう書く。

「几帳面に同じ大きさで揃えては、ならない。左右の高さにも、ばらつきがあつたほうがいい。そうしないと、すぐにお辞儀をして、前倒れになってしまう」

自慢げに書いているが、そんなことに習熟してどうする、という気もする。なにしろ、ぶどうを人に貰っても、置場がないからコーヒーカップに挿していた。地震がくればひとたまりもない条件がすべて揃っている。

### ●密室殺人の犯人は本？

唯一、本がないのが浴槽で、浴室の脱衣場にも本は侵蝕していた。ある日、風呂に入ろうとしたところ、浴室のドア前に積んであつた本が崩れ、そのまま閉じ込められた悲喜劇

を描いたのが『随筆 本が崩れる』だ。この本は、脛に傷持つ蔵書家の間で、大いに話題になった。ベッドに寝ているだけで、本が顔面を直撃し、風呂に入ろうとするだけで浴室に閉じ込められる（密室殺人？）ぐらいだから、東京でも震度5強で揺れた、三・一一にまだ生きていたら、いったいどんなことになっていたか。いや、草森のことだから、もし地震で崩れた本に圧殺されても本望だったかもしれない。

ちなみに草森蔵書は、没後、担当編集者を始め知人による「蔵書整理プロジェクト」が生まれ、すべての本を分類、整理をしたのちリスト化された。草森は生前、自分の蔵書数を「4万冊」と言っていた。これは、月に少なくとも150冊は買うから、20年を経ればその数になる、という計算だった。しかし、実際には3万冊ぐらいだったようだ。蔵書家に「いったい、何冊ぐらい本をお持ちですか？」と尋ねることが、いかに愚かしいことかがわかる。規格の揃わない本棚が10本を超え、そこからはみだした本がいたるところに積み上げられた状況下では、3万冊も4万冊も大して変わらない。

しかし、このマンションに入る前に、すでに3万冊を故郷の書庫に移している。足せば6万冊は所持していたことになる。草森の蔵書管理は、自分は大きな地震に遭わないと根拠なき信念の下にあった。私だってそうだ。

本を必要以上に、際限なく溜め込む人は、個人差はあるだろうけど、どこか真つ当な人生を投げ捨ててしまっているのではないか。生活空間のほとんどを、本が占領している住居というのは、一般的な通念からすると、どう考えてもまともではない。積みあげて崩して、また積みあげての繰り返しから学ぶものはない。あるのは、本来あるべき理想の書齋というステロタイプから決壊し、とめどもなく野方図に、ただ目の前の欲しい本がぶらさがっているからただ買い続けるという計算の狂った欲だけだ。

次回はこの数字を上回る蔵書家だった谷沢永一が、阪神大震災で被災した話を書くつもり。